

シンボジウム／声・歌・ことばの力

つたえる

— 佐々木喜善『聴耳草紙』の再発見 —

石井 正己

—

日本口承文芸学会の三〇周年記念事業として企画された「ことばの世界」全四巻が、平成一九年（二〇〇七）一月から毎月刊行で三弥井書店から発刊された。第一巻の「つたえる」を総論として、第二巻に「かたる」、第三巻に「はなす」、第四巻に「うたう」を各論にして構成した。それぞれの巻を動詞で命名したのは、一般向けのわかりやすさを考慮しただけでなく、これまでの名詞によるジャンル区分を活性化したいという願いもあった。

口承文芸については、特にその問題が大きかった。民俗学では公認されていても、辞典の見出し語は「口承文学」であって、一般的な語彙にはなっていない。また、研究の細分化が進んだ結果、口承文芸という広がりで議論することが難しくなっている。そうしたときに、改めて「つたえる」という本質に向き

合える場所が必要なのではないかと考えた。なぜならば、急激な情報化と国際化を迎えた変動の時代にあつて、「つたえる」という行為はこれまで以上に重要な意味を持つと考えられるからである。

その際、昭和六年（一九三二）に発刊された佐々木喜善の『聴耳草紙』は、ずいぶん昔の資料でありながら貴重な示唆を与えてくれる。柳田国男は「序」で、佐々木は採集者として、己をむなしくするほどの大変な努力を重ね、客観の記録を残すことができたとする。しかし、これは、佐々木の達成を高く評価しながらも、採集者は将来の研究者のためにあるとする抑圧でもあつた。柳田は一郡一島単位で昔話集を作るべきだと考えていたが、『聴耳草紙』は東北地方に伝わる昔話を寄せ集めたので、それ自体がすでに大きな対立を孕んでいたのである。

ここに言う客観の記録とは、あまり下品な部分を切り捨てたり、我意に従つて取捨を行つたりする傾向を克服したことを意味している。そればかりでなく、それぞれの話の末尾には、いつ頃、誰が聞いた話であるかが明示されている。この本は確かに誤植が多いし、発刊までの経緯が複雑だったこともあつて、少なからぬ混乱を招いたことは否定できないにしても、話の素姓を明らかにした意義は高く評価されていいだろう。

その結果、『聴耳草紙』は、佐々木自身の記憶を核にしながら、周囲の人々からの聞きで幅を広げ、さらに多くの協力者の報告に拠つてできあがつたことが明らかになった。こうした方法に

ついても、「間接採集」の名のもとに一蹴することは簡単であろう。しかし、録音技術もままならなかった時代であつて、東北地方に伝わる昔話を集成するためには、必要不可欠な方法だつたと考えられる。

二

こうして集成された三〇三話の中に、「第一一四番 鳥の譚」の「夫鳥（その六）」がある。夫鳥とはコノハズクのことである。

ある所に若夫婦があつた。ある日二人で打揃うて奥山へ蕨採りに行つた。蕨を採っているうちに、いつの間にか二人は別れ別れになつて、互に姿を見失つてしまつた。若妻は驚き悲しんで山中を、オットウ（夫）オットウと呼び歩いていくうちにとうとう死んで、あのオットウ鳥になつた。

また、若妻が山中で見失つた夫を探し歩いてみると、ある谷底でその屍体を見つけて、それに取り縋り、オットウ、オットウと悲しみながらとうとうオットウ鳥になつた。それで夏の深山の中でそう泣いているのだともいう。

齡寄達としよりの話によると、この鳥が里辺近くへ来て啼くと、その年は凶作だといっている。平素ふだんはよほどの深山に住む鳥らしい。

（私の稚い記憶、祖母から聴いた話。）

この話では、蕨採りに行つた若夫婦が別れ別れになるが、妻

が夫を探せずに鳥になる場合と、妻が夫の屍体に縋つて鳥になる場合の二通りあつたことがわかる。これは『遠野物語』の五一話としてもよく知られ、それは長者の男の子と女の子の話になつてゐるが、内容は「夫鳥（その六）」の前段と一致している。

注意されるのは、「齡寄達としよりの話によると」と以下の記述である。これは話そのものというより、「私の稚い記憶、祖母から聴いた話」を記録する佐々木の認識を表している。深山に住む鳥が里に来て鳴くと飢饉になるといふ伝えは、『遠野物語』五二話の馬追鳥に見られるが、『聴耳草紙』の「馬追い鳥（その九）」には見つからない。佐々木が馬追鳥から夫鳥に修正したとも考えられるが、両様の伝えがあつたと考えればいいだろう。

佐々木にこれを語つた祖母のノヨは天保一三年（一八四二）に生まれ、大正九年（一九二〇）に亡くなつてゐる。「齡寄達としよりの話によると」とあることからすれば、その世代に共通する認識だつたことになる。祖母たちの時代まではしばしば凶作が起つていたので、絶大な恐怖があつたはずである。夫鳥の鳴き声が里辺で聞かれると凶作の前兆であり、それは飢饉による死を予感させたにちがいない。夫鳥の話は命に関わる伝えだったのである。

しかも、「あのオットウ鳥になつた」から見ると、佐々木自身も夫鳥を認識しているが、「平素ふだんはよほどの深山に住む鳥らしい」からすれば、深山で鳴き声を聞く経験はなかつたことになる。

『遠野物語』五一話に、「夏の夜中に啼く。浜の大槌より駄賃附の者など峠を越え来れば、遙かに谷底にて其声を聞くと云へり」とあるのは、遠野と大槌を往来する駄賃附の経験であり、それを伝え聞いていたのである。こうした細部は佐々木の認識を正確に記しているにちがいない。

佐々木は明治一九年（一八八六）に生まれ、昭和八年（一九三三）に亡くなっている。彼が生まれてから後も冷害による凶作はしばしば起こったが、飢饉で死ぬことはなくなる。凶作による死の恐怖が薄らぐことは、この話を伝える意義が失われてゆくことを意味している。近代化の中で口承文芸を伝えることがなくなつてゆく理由は、こんなところにあつたのである。柳田は客観の記録と言つたが、こうした細部には佐々木の時代感覚がよく表れていて、それゆえに大きな意義を持つように思われる。

三

この夫鳥の話を読むときに思い出されるのは、佐々木の住んだ山口よりさらに奥地にある恩徳に暮らした三浦徳蔵の生き方である。三浦は大正八年（一九一九）に生まれ、平成二〇年（二〇〇八）に亡くなつたが、「山の賢人」と呼ぶにふさわしい人物であつた。恩徳は標高が高くて米が穫れないので、その他の雑穀や山の恵みを糧にしてきた。凶作というとき、その念頭にあるのは米なので、その生産さえ難しい場所はさらに冷害の

影響を受けやすく、過酷な生活環境にあつたとも言える。

遠野市立博物館編『遠野の野鳥』（遠野市立博物館、一九八三年）の巻末には、三浦が記録してきた野鳥の初鳴きのデータが掲載されていて、その中にはコノハズクも入っている。三浦が野鳥の初鳴きに聞き耳を立てるのは、祖母ノヨのような感性とつながるが、記録を取つて生活に生かそうとするのは、佐々木の持つていたような科学的な思考に近い。恩徳の地に生涯を送つた三浦は、古い感性と新しい思考を生きてきたのである。

もちろん、三浦の観察記録がどの程度有効であつたかは、これから十分な検証が必要である。日本でも、明治一七年（一八八四）から日々の天気予報が出されるようになっていた（『平凡社大百科事典』10、一九八五年）。佐々木が夫鳥の鳴き声から遠ざかつてゆくのは、彼が天気予報の普及とともに育つたことと関連している。そこでは、口承文芸が伝える予兆の知恵よりも、科学的な知識を尊重する思考が生まれてきたにちがいない。

昔話研究では、すでに花部英雄が「鳥の昔話と飢饉——「山鳩不孝」を中心に——」（『昔話——研究と資料——』第二九号、二〇〇一年七月）で、青森・岩手・秋田各県に伝わる「山鳩不孝」と飢饉の歴史を指摘している。「山鳩不孝」のサブタイプの変容を分析したうえで、中国から来た「鳶不孝」（「雨蛙不孝」とも）から生成したと考えている。

また、立石展大は「日中「小鳥前生譚」の比較研究」（『口承

『文芸研究』第二七号、二〇〇四年三月）で、農村生活にあつて、鳥の鳴き声に耳を傾け、天候変化の予兆を探ることは、日本のみならず、中国でも共通すると指摘している。さらに「時鳥と兄弟」は日中のつながりがあるものの、その他はそれぞれで生まれ、語られてきたのだからとも推測している。

こうした小鳥前生譚を伝えるのは、アジアだけではない。日本民話の会・外国民話研究会編訳『世界の鳥の民話』（三弥井書店、二〇〇四年）の「一章 コノハズクになった子ども―小鳥前生譚―」には、中国、ドイツ、アイヌ、チャム（ベトナム）、セルビア、フランス、キャリアー（カナダ）、イギリスの一四話を収録している。こうした問題を人類史の視野で議論できる基盤が整備されつつあることになる。

地球上では、飽食の時代を迎えた一方で、飢餓に苦しむ人々が絶えないだけに、こうした話を研究する社会的な意義は大きい。「つたえる」という口承文芸の本質に関わるテーマを据え、発生や伝播に限らず、それを支えた思考をとらえることが必要である。そうした際に、変動する時代の口承文芸を見つめた『聴耳草紙』のような記述は、まだ発見されないままに眠っているにちがいない。人類史の視野に立って「つたえる」ということ考える口承文芸研究は、ほとんど始まっていないように思われる。

（いしい・まさみ／東京学芸大学）